



長岡京期の京都

はじめに

桓武天皇は天応元（781）年に即位すると、延暦3（784）年には70年余りの都であった平城京から長岡京に遷都し、その10年後の延暦13（794）年には長岡京を廃して平安京に遷都しました。

長岡京はわずか10年間の都でしたが、古代日本国の首都として、政治・文化・国際

交流の中心地でした。しかし、文献史料が乏しいため、その実態はほとんどわかっていませんでした。そのため、“幻の都”とか、都を平安京に遷すために、仮に造った都とも考えられていました。

なぜ長岡京に遷都をしたのか

なぜ長岡京に遷都をしたのかを知るために、なぜ平城京が廃されたのかを見てみましょう。まず、光仁・桓武天皇の相次ぐ即位で天武系から天智系へと皇統が交替したという背景を理解する必要があります。天武元（672）年の壬申の乱で勝利した大海人皇子は天武天皇として即位しました。その後約100年間にわたり、天武天皇の子孫で皇位が継承されてきました。ところが、称徳天皇（女帝）が死去すると、彼女は独身であり適当な近親者がいなかったため、神護景雲4（770）年に天智天皇の孫である白壁王しらかべのおおきみが光仁天皇として即位しました。光仁天皇は桓武天皇の父にあたります。しかし、光仁天皇が即位したといっても、直ちに皇統が天智系に替わったわけ



史跡長岡宮跡の石碑

長岡京期の京都



長岡京想像復原図

(早川和子作画：向日市文化資料館提供)

たことが発覚し、廢后・廢太子されました。そこで、光仁天皇と渡来系氏族出身のたかののにいがさ高野新笠の子である山部親王が皇太子となり、光仁が引退した後、天応元（781）年に桓武天皇として即位しました。ここに、天武系の皇統から天智系の皇統へと移ったのでした。

このように、新たに天智系の王朝を創設したとも言えるような状況の中、桓武天皇は、天武系の皇統を支持する反桓武勢力と対峙する必要がありました。そういった勢力を一掃するためにも新たな都を造りたいと願ったのでしょう。また、僧道鏡が称徳天皇に取り入り皇位に就こうとしたように、仏教勢力が政界に介入することを取り除く必要がありました。平城京内には大寺院が多数ありますので、平城京を廢する必要がありました。

このように考えると、平城京を廢することが肝要であって、新都はどこであってもよかったとも言えます。それでは、なぜ、桓武天皇は長岡村に都を造ったのでしょうか。

第一に、この付近は渡来系氏族、特に秦氏が住まう地であったという点が挙げられます。土地が開け、産業も盛んな地であり、秦氏らの有形無形の援助が期待できます。また、長岡京への遷都と新都

ではありません。光仁天皇の皇太子は、光仁天皇と井上皇后（聖武天皇の娘）の間に生まれた他戸親王おさべであり、天武系と強く関わっていました。逆に言えば、天武系の女性を妻にしていたからこそ、光仁は天智系であっても、天皇になれたと言えるでしょう。

その後、皇后と皇太子が光仁天皇を呪い殺そうとしてい

の建設に尽力した藤原種継たねつぐの母は秦氏出身ですし、桓武天皇の外祖父おとつぐ乙継が渡来系氏族出身であることも影響を与えたと考えられています。

第二に、桓武天皇が「朕、水陸の便をもってこの邑に遷都す」と述べているように、長岡村付近は水陸交通の便がよいことが挙げられます。水上交通を利用すると、淀川からは西の瀬戸内海に抜けま
すし、桂川・宇治川・巨椋池おぐらいけからは北や東の諸国に通じます。陸路では、平城京から出た山陰道や山陽道がこの近くを通過していました。この“水陸交通の便がよい”という理由は、長岡村が難波宮と淀川で通じていたという内容で特に重視する考えがあります。発掘調査により、長岡京の大極殿は、難波宮の大極殿を移築したことがわかりました。

平城京を廃して新都に遷都するには、平城京内に多くの反対勢力があったと想定されますが、そういった勢力を押さえ込むには遷都をスピーディーに行い、遷都を既成事実化してしまうことが必要です。新都に移築するために平城宮の建物を解体すると、平城京の人々が目にする事となり、反対勢力の警戒感を増大させます。平城京から遠く離れた難波宮の建物を新都に移築すると、平城京の人々を刺激せずに新都を造営することができます。難波宮の建築部材を水運で運搬するには、長岡村はうってつけの場所であったと言えるわけです。

最後に、桓武天皇は乙訓の地で生まれ、幼少の頃を過ごしたため、乙訓の地に



長岡宮の築地造営復原図
(早川和子作画：向日市文化資料館提供)

長岡京期の京都

都を遷したという考えもあります。桓武天皇の母高野新笠^{たかののにいがさ}は乙訓郡大枝地方に住んでいた土師氏^{はじし}出身と推測されており、当時の妻問婚という形態から、母方の家で子供が育てられたと考えられるからです。

なぜ長岡京を廃都としたのか

さて、桓武天皇は延暦3（784）年5月に遷都の発表、長岡の地に下見の使者を派遣、6月には造長岡宮使の任命、11月には長岡京へと遷っていきます。このように、長岡京への遷都は、遷都の発表後、わずか6か月足らずで行われました。この時点では、宮城内の主要な部分だけが完成していたのでしょう。

遷都後も新都の造営工事は盛んに行われていたでしょうが、遷都後、まだ1年と経たない延暦4（785）年の夜、造営長官藤原種継が、何者かの手によって暗殺されてしまいます。その下手人を捕まえて見ると、有力氏族の同伴家持^{やかもち}・同伴継人^{つぐひと}らが首謀者と判明し、桓武天皇の弟である皇太子早良親王^{さわら}が一枚噛んでいたこともわかりました。早良親王は捕らえられ、乙訓寺に幽閉されますが、早良親王はハンガーストライキを行い、無実の罪を訴えますが、体力が弱っていたため、配流先の淡路島に入る前に亡くなってしまいます。

早良親王の死後、皇太后、皇后、夫人が相次いで亡くなり、皇太子が病に伏したり、蝦夷討伐軍^{えみし}が大敗して帰って来るなど、天皇の周りに不幸が重なって起こります。また、天然痘が流行したり、大雨で式部省の門が倒れたり、都が洪水の被害を受けるなどの天変地異が相次いで生じています。陰陽寮に占わせると、「早良親王の祟りである」と言われ、その怨霊を鎮めようとしますが、その恐れを取り除くことが出来ません。このように、早良親王の怨霊に悩まれたために長岡京を棄て、新京を造営するに至ったという考えが有力です。

このほかにも、史料に何度かの洪水の記事が見えることから、長

岡京が水害に対して極めて弱い地形であることが判明したために廃都したという考えや、水害に備えて都を改造するためには新たな都を建設するのに匹敵するほどの巨額な費用が必要であったため、改造をあきらめて新都の建設を決意したという考えがあります。



長岡京跡左京二条三坊十五町の貴族の邸宅跡

また、実際に遷都を行ったところ、長岡京が地理的に手狭であったために、新たな都、平安京へと遷都したという考えもあります。実際、都の南東には桂川があり、西南部は丘陵となっており、都城を造ることができない地形となっています。

以上の考えを組み合わせると、長岡京遷都から廃都までを説明する考えもあります。

新王朝の創設の気概を持って天皇に即位した桓武天皇は、中国の天命思想に則り、新王朝には新都を造営すべきと考え、長岡京に遷都しましたが、その地が早良親王の祟りや大雨などの災厄のために穢れたものとなり、その地を廃してやり直すために平安京への遷都を決意した、というものです。

以上、なぜ長岡京に遷都し、すぐに廃都したのか、という考えをいかつままで紹介しましたが、当時の史料が破棄されており、詳しい事情はよく分からないというのが実情です。

平成 22 年度には、長岡京内で通算 2,000 回目の発掘調査が実施されました。これからも地道に調査を続けていけば、短命の都もその姿が徐々に明らかとなるでしょう。

(岩松 保)